

コロナに比べて大きなリスク

がん社会 を診る

中川 恵一

今回は38度の発熱がありました。今回も39度の熱で、少しづらいいいをしました。

3回目接種に先立って、11月末にコロナウイルスのスパイク（突起部分）に対する抗体量を測りました。結果は266・5AU/m1でした。

抗体量の検査は初めてでしたから、私の体内の抗体量がどこまで上がったかは分かりません。今年5月、長崎大学が、日本人を対象としたファイザーのワクチン接種後の抗

体価に関する調査研究を発表しています。それによると、初回接種後14日の中央値は約1000AU/m1、2回接種後7日の中央値は約2200AU/m1でした。

横浜市立大学の調査では、2回目接種後6カ月での抗体価はピークの7%にまで低下しています。それにしても、

2回目から約8カ月で266・5AU/m1という私の数字はかなり低いと言えます。

飲酒習慣がある人や年齢が高い人ほど、6カ月後の抗体価が低くなるのが分かっていますので、61歳で、酒好きの私の数字が低くなるのはやむを得ないかもしれません。

さて、懸念されているオミクロン株ですが、十分なデータが集まったとはいえないものの、感染力は強い一方、重症化や死亡例はほとんどないようです。

がん細胞と同様に、ウイルスも変異を繰り返して「進化」していきます。一般的に言えば、ウイルスは弱毒化の方向に進化する傾向があります。薬観にすぎるとは思いませんが、コロナ禍からの出口が見え始めたように思います。

さて、昨年12月1日から先月末までにコロナで亡くなったのは16208人で、一日あたりの平均は約44人です。

一方、がんによる死亡は年間およそ38万人。一日あたりでは1040人にも上りますから、ケタが違います。

また、コロナで死亡した人の平均年齢は80歳を超えますが、私の義妹が48歳の若さで大腸がんのため命を落としたように、がんは若い世代にも牙をむきます。

がんはコロナとは比べられないほど、大きなリスクです。そして、がん検診の自粛によって、進行がんが増えるなど、がんリスクの巨大化が避けられない状況です。

（東京大学特任教授）

先週、3回目の新型コロナウイルスワクチンの接種を受けました。初回、2回目とも東大病院で受けましたが、今回は私が住む東京都、千代田区のクリニックで接種しました

千代田区役所から郵送された接種券には、3月と4月に東大病院でファイザー社のワクチンを接種したことが記載されていました。6月には千代田区から初回接種の案内が来ていましたが、管理体制が進んだと実感できました。

初回は激しい肩の痛み、2



イラスト 中村 久美